

宮崎友禪斎と友禪染

—友禪斎筆「白衣観音図」扁額(清水寺所蔵)について—

河 原 田 康 史

〔要旨〕 宮崎友禪斎は、洛東の知恩院門前辺りに居住し、天和～享保(1681～1736)頃に活躍した。友禪斎は「絵扇」で一躍有名になり、その絵模様を「小袖」にも描いた。友禪斎の名前にちなみ、現在では「友禪染」という名称が、広義では「キモノの染物全般」を、狭義では「挿し彩色」を指して用いられることが多い。友禪斎については、生没年や生没地、妻子の存在、加賀友禪との関係などにおいて不明な事柄が多い。

本稿では、北法相宗音羽山清水寺が所蔵する宮崎友禪斎筆「白衣観音図」扁額について論じる。扁額右下には、「奉納者である歌舞伎役者名」と「制作者である友禪斎」の署名がある。「奉納者である歌舞伎役者名」を判読できると、友禪斎が京都で扁額を制作した年号が大方理解できる。

本稿の構成として、最初に研究報告会で発表した内容を基に、「白衣観音図」扁額に関する先行研究について整理する。次に先行研究における私見を述べると共に、扁額右下にある署名を判読するために、扁額の拡大写真を用いて「奉納者である歌舞伎役者名」について考察する。最後に研究報告時に筆者が仮説として立てた「奉納者である歌舞伎役者名」の真偽を検証するため、その後の研究によって新たに明らかになった事柄について考察する。

目次(大見出しのみ)

- | | |
|-----------------|--------------------|
| I. はじめに | II. 先行研究 |
| III. 先行研究に対する私見 | IV. 「初代・嵐三郎四郎」について |
| V. おわりに | |

I. はじめに

宮崎友禪斎は、洛東の知恩院門前辺りに居住し、天和～享保（1681～1736）頃に活躍した。彼は「絵扇」で一躍有名になり、その絵模様を「小袖」⁽¹⁾にも描いた。友禪斎の名前にちなみ、現在では「友禪染」という名称が、広義では「キモノの染物全般」を、狭義では「挿し彩色」⁽²⁾を指して用いられることが多い。

友禪斎については、生没年や生没地、妻子の存在、加賀友禪との関係などにおいて不明な事柄が多い。

「紀要第19号」では、宮崎友禪斎が「友禪染」の制作工程の中で「下絵（意匠）」のみを描き、「糊糸目→挿し彩色」⁽³⁾には関わらなかったのではないかという仮説について論じた。「紀要第20号」では、「友禪斎の墓石」について、石川県金沢市にある「曹洞宗祥雲山龍国寺」⁽⁴⁾の現地調査を交えて論じた。⁽⁵⁾現地調査では、「友禪斎の墓石」から「拓本」を介して刻まれた文字を判読するという試みを行った。

ところで、現在、宮崎友禪斎が確実に制作したとされる遺品は少ない。現存するものとして、著作物が3点、作品が2点ある。本稿では、作品の1つである「北法相宗音羽山清水寺」⁽⁷⁾が所蔵する友禪斎筆「白衣観音図」⁽⁸⁾扁額⁽⁹⁾（図1参照）について論じる。本稿の狙いは、扁額の中に記されている「署名」を明らかにすることにある。「署名」には、「奉納者である歌舞伎役者名」と「制作者である友禪斎」の2つが記されている。「奉納者である歌舞伎役者名」を判読できると、友禪斎が京都で扁額を制作した年号が大方理解できる。しかし、扁額の中にある署名は、ほとんど肉眼では判読できないようである。⁽¹⁰⁾そこで、扁額の拡大写真（図8参照）を用いることによって、「奉納者である歌舞伎役者名」を判読しようと試みた。その際、判読できそうな文字の間隔を囲みで区切ること（図9参照）によって、先行研究で推察された「奉納者である歌舞伎役者名」と比較検討しながら読み解くことにした。

本稿の構成として、研究報告会⁽¹²⁾で発表した内容を基に、最初に「白衣観音図」扁額に関する先行研究について整理した。次に先行研究における私見を述べると共に、扁額右下にある署名を判読するために、扁額の拡大写真を用いて「奉納者である歌舞伎役者名」について考察した。最後に研究報告時に筆者が仮説として立てた「奉納者である歌舞伎役者名」の真偽を検証するため、その後の研究によって新たに明らかになった事柄について考察した。

Ⅱ．先行研究

図1は、清水寺が所蔵する宮崎友禪齋筆「白衣観音図」扁額であり、縦152.1cm、横191.5cmという大きさの扁額である。著色画であるが、彩具の剥落や退



図1 宮崎友禪齋筆「白衣観音図」扁額（清水寺所蔵 縦152.1cm 横191.5cm）

【写真提供 株式会社便利堂】

色がひどく、辛うじて図様の大体と作風のおおよその特色がうかがい得られる作品であるとされる。⁽¹³⁾

以下では、「白衣観音図」扁額に関する先行研究として、「清水寺奥の院」の軒先に掲げられていたという事柄と、扁額の中に記されている「署名」に関する事柄の2点について整理する。「署名」に関する事柄については、奉納者と制作者に分けて整理する。

なお、先行研究に関わった人物として、明石染人氏、土居次義氏、野間光辰氏⁽¹⁴⁾の3名が挙げられる。⁽¹⁵⁾「白衣観音図」扁額が「清水寺奥の院」の軒先に掲げられていたことについての研究は、土居氏のみが考察している。「白衣観音図」扁額の中に記されている「署名」の文字・文字数についての研究は、明石氏、土居氏、野間氏の3名が考察しており、「署名」の中に記されている「奉納者である歌舞伎役者名」についての研究は、明石氏、野間氏の2名が考察している。⁽¹⁶⁾

1. 長沢蘆雪筆「東山名所図」屏風に描かれた「清水寺奥の院」

図2は長沢蘆雪が描いた「東山名所図」屏風（六曲一隻）である。⁽¹⁷⁾右隻右

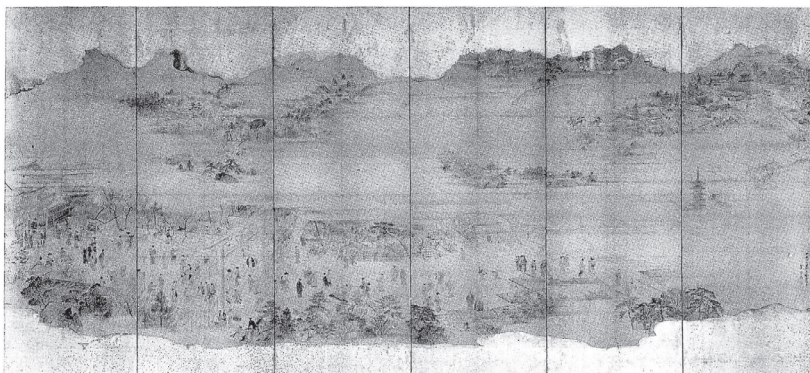


図2 長沢蘆雪筆「東山名所図」屏風（六曲一隻）

【「蘆雪二題 鶉飼図 東山真景図屏風」土居次義
『季刊アート20（1－3）』マリア書房】

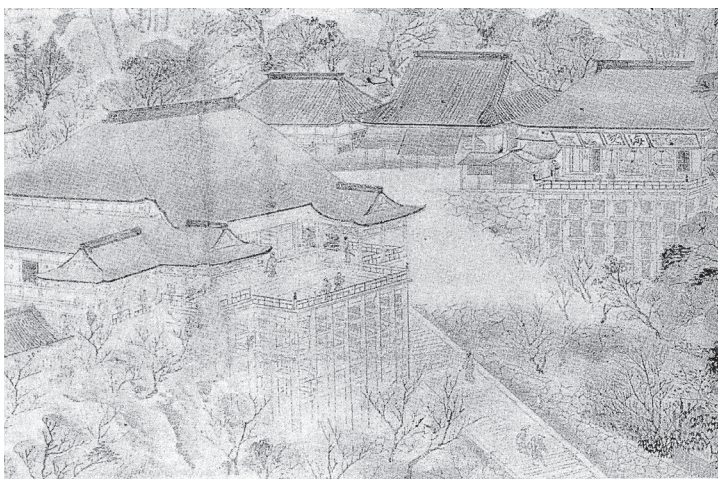


図3 長沢蘆雪筆「東山名所図」屏風（右隻上方拡大）
 【「蘆雪二題 鵜飼図 東山真景図屏風」土居次義
 〔『季刊アート20（1－3）』マリア書房〕】

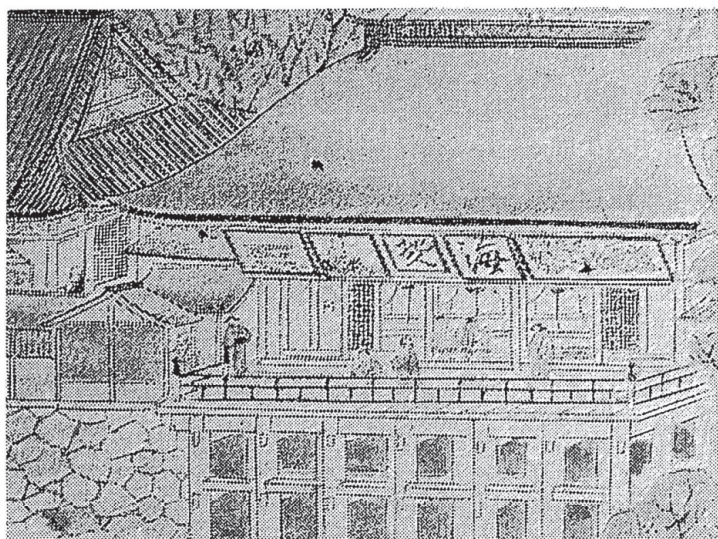


図4 長沢蘆雪筆「東山名所図」屏風（右隻上方最大拡大）
 【『絵馬一清水寺』土居次義（清水寺）】

下には、蘆雪による「安永戊戌夏六月圓山家二而 蘆雪寫」という署名が施されている。署名より「東山名所図」屏風は、蘆雪が安永7年(1778)6月に円山応挙宅で描写または模写したとされる屏風であり、蘆雪が25歳の頃の作品である。蘆雪は、屏風下半分の左隻に「祇園社南門・石鳥居」「二軒茶屋」、上半分の左隻に「双林寺」「東大谷」「長樂寺」などを描き、中央の右隻に「高台寺」「法観寺(八坂の塔)」、上半分の右隻に「正法寺」「清水寺」へと至る京都東山の風景を描いている。右隻右上には「清水寺の堂塔伽藍」を描いており、「奥の院」の軒下に宮崎友禅斎筆「白衣観音図」扁額が掲げられた絵も描いている。

図3は長沢蘆雪が描いた「東山名所図」屏風の右隻上方を拡大したものである。左手前から清水寺の「回廊」「本堂(舞台)」「釈迦堂」「阿弥陀堂」「奥の院」が描かれている。図4は、図3に描かれている「奥の院」をさらに拡大したものである。

土居次義氏は著書『絵馬―清水寺』⁽²²⁾の中で、「東山名所図」屏風の中に描かれた「清水寺奥の院」について記している。その内容を要約すると、次の4点になる。

- ①「清水寺奥の院」の軒下には、西に面して扁額が5面掲げられていた様子が描写されており、そのうち向かって左側より2枚目に、宮崎友禅斎筆「白衣観音図」扁額が掲げられていたことを知ることができる。
- ②『拾遺扁額要覧』⁽²³⁾の「清水寺奥の院の条」に、扁額として友禅斎筆「白衣観音図」の他に僧祐識筆「海」字額、長谷川雪朝筆「金剛競腕図」、「通商船図」が挙げられている。
- ③「東山名所図」屏風の中に描かれた「清水寺奥の院」の軒下には、「海」字額、「金剛競腕図」が西に面して掲げられている様子が描かれているが、現存している作品は友禅斎筆「白衣観音図」だけである。
- ④友禅斎筆「白衣観音図」扁額がいつ取りはずされたかは明らかではないが、多分明治以降のことではないかと思われる。

以上より、「白衣観音図」扁額は、「清水寺奥の院」の軒下で、外気や風雨・西日に当たりながら、江戸時代中期である1700年前後から掲げられたとされ、明治時代前後までのおよそ150年から200年の間掲げられていたとされる。その後、この扁額は長らく行方不明であったが、土居氏が昭和28年（1953）に「清水寺釈迦堂」に収納されている何面かの扁額の中から発見した。⁽²⁴⁾

2. 宮崎友禪齋筆「白衣観音図」扁額に記された「署名」

図1の宮崎友禪齋筆「白衣観音図」扁額の右下部分には、奉納者と制作者の「署名」が記されている。それぞれの「署名」の文字・文字数に関する先行研究については、明石染人氏（図5参照）、土居次義氏（図6参照）、野間光辰氏（図7参照）の3名が考察している。

(1) 奉納者

奉納者について、図5～図7の中に書かれている「署名」の文字を比較すると、共に「嵐三」と「四」という文字が確認でき、「郎」という文字も確認できたのかも知れない。但し、奉納者の「署名」に記された文字数が、図5が「7文字」、図6が「5文字」、図7が「6文字」であり、それぞれ異なる。

次に、「署名」の中に記された「奉納者である歌舞伎役者名」に関する先行研究については、明石染人氏と野間光辰氏が行っている。

明石染人氏は、著書『宮崎友禪齋と近世の模様染』⁽²⁵⁾の中で、清水寺に奉納した可能性がある歌舞伎役者について、表1『「白衣観音図」扁額を奉納した可能性がある嵐姓の歌舞伎役者』の中にある1段目から4段目の「初代・2代・3代・嵐三右衛門」の3名と「初代・嵐三五郎」の合計4名を挙げている。さらに、明石氏が同書の中でそれら歌舞伎役者について記した内容について要約すると、次の3点になる。

- ① 3代・嵐三右衛門または初代・嵐三五郎が、扁額の奉納者であると思われるが、初代・嵐三五郎の方が近いように思われる。

②赤外線撮影を行っても、奉納者名がはっきりしなかった。

③宝永・正徳・享保初年頃に制作された扁額であり、友禅斎が50歳以上に制作した代表作とみてよいであろう。

なお、②については、昭和28年（1953）当時の赤外線撮影である。60年以上経った現在の最新の赤外線撮影を用いれば、おそらく奉納者名が特定できるように思われる。筆者は清水寺に赤外線撮影を依頼したが、作品の劣化が生じる可能性があるとして、許可されなかった。⁽²⁶⁾

一方、野間光辰氏は、論文『再説嵐無常物語』⁽²⁷⁾の中で、「嵐三郎四郎」（表1参照）が「白衣観音図」扁額を清水寺奥の院に奉納したと断言している。野間氏が「白衣観音図」扁額について記した内容を要約すると、次の4点になる。

①明石染人氏は、「白衣観音図」扁額の中に「友禅」という名前を発見したことに満足をして、奉納者には深く留意しなかった。

②奉納者は僅かに残る文字から判断して、紛れもなく「嵐三郎四郎」である。

③「嵐三郎四郎」が清水寺奥の院に扁額を奉納したのは、『嵐無常物語』の文中にある柳田久松を自殺に追いやったことに対する自責の念を持っていたからであろうか。

④扁額は、貞享1・2年（1684・1685）頃に友禅斎によって制作された後、清水寺奥の院に奉納されたものとする。

(2) 制作者

制作者について、図5～図7の中に書かれている「署名」を比較すると、図5では「友禅圖」、図6・図7では「友禅図」という文字が考察され、すべて「3文字」の文字数であると確認できたようであるが、「新字体」と「旧字体」の違いがある。

Ⅲ．先行研究に対する私見

先行研究では、上記のとおり、宮崎友禪斎筆「白衣観音図」扁額が「清水寺奥の院」の軒先に掲げられていたという事柄と、扁額の中に記されている「署名」に関する事柄の2点について整理した。

以下では、先行研究における後者である「白衣観音図」扁額の中に記されている「署名」に関して、奉納者と制作者に分けて私見を述べる。特に「奉納者である歌舞伎役者名」について、筆者は野間光辰氏の説と同じく「嵐三郎四郎」であると推察する。⁽²⁸⁾「嵐三郎四郎」については、「初代・2代・3代・4代」の4名が存在したため、それぞれの特徴について概要する。その後、それぞれの嵐三郎四郎が、宮崎友禪斎と出会う時機の可能性について考察する。

1. 宮崎友禪斎筆「白衣観音図」扁額に記された「署名」

先行研究に示したとおり、宮崎友禪斎筆「白衣観音図」扁額の中に記されている「署名」の文字・文字数について、明石染人氏（図5参照）、土居次義氏（図6参照）、野間光辰氏（図7参照）の3名が考察している。

筆者は、「署名」に記されている文字を明らかにするために、「白衣観音図」扁額右下の署名部分を拡大した写真を用いて、考察することを試みた（図8参照）。すると、一番上の「嵐」という文字以外、ほとんど見えない状態にある。そのため、判読できそうな文字の間隔を、囲みで区切ってみた（図9参照）。

(1) 奉納者

図10は、図9を基に、筆者が筆ペンで判読できる文字をなぞったものである。その結果として、奉納者に関する「署名」に記された文字は、「嵐□□四郎」または「嵐三□四郎」と判読できそうである。よって、「署名」の文字数

は、「嵐」という文字を含めて「5文字」になると思われる。先行研究の中では、土居次義氏が考察している図6が「5文字」であるため、最も整合している。したがって、明石染人氏が考察している図5の「7文字」、野間光辰氏が考察している図7の「6文字」については、誤りであろう。

先行研究における「奉納者である歌舞伎役者名」については、明石染人氏と野間光辰氏が考察している。その中で、明石染人氏が先行研究の中で考察した内容は、信憑性に欠ける部分が多い。なぜなら、「嵐三右衛門」または「嵐三五郎」は、共に「四」⁽²⁹⁾という文字が存在しないため、そして図5に示した「7文字」という「署名」の文字数においても誤りであるため、「奉納者である歌舞伎役者名」とするには適切ではない。さらに、明石氏が「白衣観音図」扁額を、「寶永、正徳、享保初年頃友禪の50歳以上の代表作とみてよいであろう」としている点においても、友禪斎が扁額を制作したとされる年号や年齢についての根拠を何も示さず、想像だけで記載しているように思われる。

一方、野間光辰氏が先行研究の中で考察した内容は、筆者の私見とはほぼ一致する。すなわち、野間氏が断言している「嵐三郎四郎」が「奉納者である歌舞伎役者名」であるとした内容である。「嵐三郎四郎」が奉納者であるならば、図6に示されている土居次義氏が記した「署名」の文字間隔や「5文字」という文字数と整合する。但し、なぜ野間氏は「嵐三郎四郎」が奉納者であると断言しながら、図7に示した「6文字」という誤った文字数を考察したかについては不明である。「嵐三郎四郎」⁽³⁰⁾については、後ほど詳述する。

(2) 制作者

先行研究における制作者について記された「署名」を比較すると、「友禪圖」(図5)または「友禪図」(図6・図7)という文字が考察され、すべて「3文字」の文字数であると確認できたようであるが、「新字体」と「旧字体」の違いがある。

「新字体」と「旧字体」の違いについては、図10を凝視すると、「友禪圖」

と記されているように思われる。つまり、「禪[○]」という文字は新字体により、「圖[●]」という文字は判読が難しいが旧字体により署名されているのであろう。なぜなら、宮崎友禪斎は、彼の著作物や作品の中に署名をする際に、旧字体の「圖[●]」という文字を用いているからである。たとえば、友禪斎が54歳頃に挿絵を描いた宝永4年（1707）に刊行された『梶の葉⁽³¹⁾』の中にある署名「洛陽畫工友禪子圖[●]之」や、友禪斎が晩年に描いたとされる自画像「無漏無主寶國行人友禪斎圖⁽³²⁾」の右下にある署名には、旧字体の「圖[●]」という文字を用いている。したがって、友禪斎は「白衣観音図」扁額の中に記した「署名」にも「圖[●]」という旧字体の文字を用いて、扁額の右下に図5と図6・図7の折衷である「友禪圖[●]」と署名したのであろう。

ところで、「白衣観音図」扁額は、宮崎友禪斎が晩年より以前に制作した作品であるように思われる。なぜなら、友禪斎は晩年に描いたとされる自画像「無漏無主寶國行人友禪斎圖[★]」の右下には「斎[★]」という文字を署名しているが、「白衣観音図」扁額には「斎[★]」という文字を署名していないからである。友禪斎は、彼が晩年よりも以前に記した著作物の中において、自らのことを「友禪（禪）」と署名している。たとえば、友禪斎が39歳頃の元禄5年（1692）に刊行された著書『餘情ひなかつた』の中にある署名「友禪」や、同年に刊行された著書『和歌物あらかい』の中にある署名「友禪」、54歳頃に挿絵を描いた宝永4年（1707）に刊行された『梶の葉⁽³³⁾』の中にある署名「友禪子圖」があげられる。そして、本稿で論じている制作年不明の「白衣観音図」扁額の右下に記されている署名「友禪圖[●]」についても「斎[★]」という文字は記されていない。したがって、友禪斎が「斎[★]」という文字を署名しているのは、晩年に描いたとされる自画像「無漏無主寶國行人友禪斎圖[★]」のみであるため、「白衣観音図」扁額は晩年より以前に制作された作品であろう。

2. 「初代・2代・3代・嵐三郎四郎」と宮崎友禪斎

宮崎友禪斎筆「白衣観音図」扁額の奉納者であろう「嵐三郎四郎」という

歌舞伎役者名は、「初代・2代・3代・4代」の4名が存在したようである。⁽³⁴⁾その中で、宮崎友禅斎が生存した頃に活動していた「嵐三郎四郎」は「初代・2代・3代」の3名である(表1参照)。「初代」は、男前であり、人気も博していたが、25歳で病氣と借金のために自殺したようである。「2代」「3代」については享年が不詳であることから、そんなに有名な歌舞伎役者ではなかったのかも知れない。

初代・2代・3代の嵐三郎四郎のいずれかが、清水寺に「白衣観音図」扁額を奉納したのであれば、宮崎友禅斎とはどのような関わりがあったのであろうか。表2『「宮崎友禅斎の生涯」に関する年表』は、表1に掲載した歌舞伎役者のおおよその活動時期・期間と、友禅斎の年齢とを照らし合わせたものである。その結果、「初代・嵐三郎四郎」は、延宝6年(1678)の友禅斎が25歳頃である16歳から嵐三郎四郎に改名して活動し始め、貞享4年(1687)の友禅斎が34歳頃である25歳に自殺をしたことがわかる。「2代・嵐三郎四郎」は、宝永3年(1706)の友禅斎が53歳頃に嵐三郎四郎と改名して活動し始めたことがわかる。「3代・嵐三郎四郎」は、享保2年(1717)の友禅斎が64歳頃に子役として嵐三郎四郎の名前で活動し始めたことがわかる。したがって、初代・2代・3代の嵐三郎四郎のいずれかが、清水寺に「白衣観音図」扁額を奉納したのであれば、友禅斎が扁額を制作したのは、彼が34歳頃より以前(「初代」が活動していた頃)か、53歳より以降(「2代」「3代」が活動していた頃)になると考えることができる。

以上のとおり、「初代・嵐三郎四郎」と「2代・3代・嵐三郎四郎」が存在した頃の活動時期には、大きな隔たりがある(表2参照)。このことは、宮崎友禅斎の活動時期や年齢にも影響を与える。たとえば、友禅斎は、晩年に「金沢」で過ごしたと伝えられている。友禅斎が60歳の時に「金沢」で顔部分を自作したと伝えられる「木製友禅斎座像」⁽³⁵⁾を制作したのは正徳3年(1713)以前であったと考えられるため、友禅斎は60歳以前に「金沢」に移り住んでいた可能性がある。または、俳人・北枝が「金沢」で没したため、友禅斎が

⁽³⁶⁾「悼句」を詠んだのは享保3年（1718）であつたとされるため、友禪斎は65歳以前に「金沢」に移り住んでいた可能性がある。したがって、もし友禪斎が「金沢」で元文元年（1736）6月17日夜9時に83歳に没したことが真実である⁽³⁷⁾ならば、60歳前半かそれ以前に「金沢」に移り住んでいたと思われる。

一方、友禪斎が「京都」に在住していた時期は50歳代半ばか後半くらいまでになる。なぜなら、友禪斎が54歳頃に挿絵を描いた宝永4年（1707）に刊行された『梶の葉』の中にある署名に、「洛陽畫工友禪子圖之」と記している⁽³⁸⁾ため、この頃に友禪斎は確実に「京都」に在住していたと言えるからである。

筆者は、宮崎友禪斎が「白衣観音図」扁額を描いたのは、「京都」に在住していた頃であると推察する。なぜなら、奉納者であつたと思われる歌舞伎役者の嵐三郎四郎は、「上方」である京都や大坂を中心に活動していたからである。もし、友禪斎が「金沢」に移り住んでしまった後に、嵐三郎四郎が扁額の制作を友禪斎に依頼するなら、「金沢」まで行くか、または手紙で遣り取りをしなくてはいけない。また、友禪斎も「金沢」で扁額を制作した後に、嵐三郎四郎が住んでいる「上方」かまたは「清水寺」に扁額を届けなくてはいけないため、お互いに労力や時間・費用に対して不経済になる。したがって、友禪斎が「白衣観音図」扁額を描いたのは、遅くても「京都」に在住していた50歳代半ばか後半くらいまでになるであろう。

その場合、「3代・嵐三郎四郎」は、扁額の奉納者でないと思われる。なぜなら、前述したとおり、3代が子役として活動したのが享保2年（1717）からになるので、友禪斎は64歳頃であり、「金沢」に移り住んでいたとされる時期と重なるためである。また、お互いの年齢差も離れすぎているように思われる。

したがって、扁額を奉納した歌舞伎役者が嵐三郎四郎であるなら、「初代」か「2代」であつたと思われる。奉納者が「初代・嵐三郎四郎」であるならば、彼が活動後期の貞享元年～貞享4年（1684～1687）頃に友禪斎に扁額の制作を依頼したように思われる。友禪斎が絵扇や絵小袖の「下絵（意匠）」で

人気を博していた頃で、彼が31歳～34歳頃の作品になる。または、奉納者が「2代・嵐三郎四郎」であるならば、彼が活動初期の宝永3年～正徳元年（1706～1710）頃に友禅斎に扁額の制作を依頼したように思われる。友禅斎が『梶の葉』に挿絵を描いた頃で、彼が53歳～57歳頃の作品になる。

但し、「清水寺奥の院」に扁額が掲げられるくらいの知名度・人気度を誇った歌舞伎役者であったことを考慮すると、「初代・嵐三郎四郎」の方が奉納者に近いように思われる。なぜなら、「初代」は25歳で自殺しているために、奉納者としては若すぎるようにも思われるが、宮崎友禅斎と活動拠点が近かっただけでなく、友禅斎と同じ頃に人気を博していたという共通点もあり、また年齢差も9歳くらいであったため、文化的交流などにより交友関係にあったとしても不思議ではないからである。したがって、筆者は、「初代」が友禅斎に「白衣観音図」扁額の制作を依頼して、清水寺に奉納したと推察する。

Ⅳ. 「初代・嵐三郎四郎」について

筆者は「初代・嵐三郎四郎」に関連する史料について調べることにした。⁽³⁹⁾なぜなら、「初代・嵐三郎四郎」が清水寺に「白衣観音図」扁額を奉納したという仮説を検証できると、宮崎友禅斎が扁額を制作した年号も大方理解できるからである。表3『「初代・嵐三郎四郎の生涯」に関する年表』は、「初代・嵐三郎四郎」（以下では「嵐三郎四郎」と表記）に関連する史料を基に、彼の生涯についてまとめたものである。史料の原文に年代の誤植があるものもいくつか存在するため、その部分については嵐三郎四郎に関連する先行研究を検討しながら、おおよその正しいと思われる《年号》《（三郎四郎の）年齢》・《（三郎四郎の）居所》を記した。

以下では、最初に嵐三郎四郎の略歴を紹介する。次に三郎四郎の人物像を把握するため、貞享5年（1688）井原西鶴著『嵐無常物語』上巻・下巻の要旨を中心に記載する。最後に、嵐三郎四郎の略歴や人物像を基に、「清水寺」

「宮崎友禪齋」との関わりについて考察する。

1. 略歴

表3を参照しながら、嵐三郎四郎⁽⁴¹⁾の略歴を紹介する。嵐三郎四郎は、寛文3年(1663)頃に「江戸」で生まれ、前名を中村勘之介⁽⁴²⁾といた。中村勘之介は、2代目・中村勘三郎の弟であったとも言われており、延宝元年(1673)の11歳の頃に「大坂」の「市村座」で六方を踏んだ。この時に嵐三右衛門も一座に所属していた。勘之介は、延宝3年(1675)の13歳の頃に「山村長太夫座」⁽⁴³⁾に移り、やがて若衆方の立役として評価された。

中村勘之介は、延宝6年(1678)の16歳の頃に「上京」し、立役者として、嵐三郎四郎と改名し、「嵐三右衛門座」で活躍した。嵐三郎四郎は、延宝8年(1680)の18歳の頃に嵐三右衛門と一緒に「大坂」へ下った。

嵐三郎四郎は、天和元年(1681)の19歳の頃に、嵐三右衛門と別れて、「京都」に戻った。その後、「岩本権三郎名代の座元」を勤めたり、貞享3年(1686)の24歳の頃に「村山又兵衛座」へ出勤したりした。三郎四郎は、貞享4年(1687)11月に「早雲長吉座」に転じた後に、春狂言の仕組の最中である12月27日に自殺した。享年25歳であった。

以上より、嵐三郎四郎は何度も座元を変更しながら、居所も「江戸→大坂→京都→大坂→京都」へと変更して、京都で最期を遂げている。

2. 人物像

前述のとおり、嵐三郎四郎は何度も座元や居所を変更しているが、貞享5年(1688)井原西鶴著『嵐無常物語』上巻・下巻は、嵐三郎四郎が主に京都を居所として展開される物語である。

『嵐無常物語』上巻・下巻は、合計7章からなる嵐三郎四郎の追善作であり、すべて三郎四郎に関連する物語が描かれている。上巻は3章からなり、三郎四郎が割腹自殺を果たすまでの生涯を描いた「最期物語」である。下巻

は4章からなり、三郎四郎が割腹自殺を果たした後もなお追慕される彼の「後日物語」である。

以降では、『嵐無常物語』上巻・下巻の要旨を記す。その後に、その他の嵐三郎四郎に関連する史料についても言及する。

(1) 『嵐無常物語』上巻⁽⁴⁴⁾

(i) 「男はしらぬ戀をするかな」では、嵐三郎四郎の前名であった中村勘之介は江戸堺町の名物と言われた。やがて、京都に上り、「嵐三右衛門座」に加入して、名前を「嵐三郎四郎」と改めた。「顔見世」に登場して以来、その芸と生まれつきの美貌により、洛中の女という女を悩殺し、悶死すること数知らずという内容が記されている。

(ii) 「念者はしらぬ思ひするかな」では、「顔見世」から何年か経過した頃、三郎四郎は京都の「岩本権三郎座」の芝居に出勤していた。東川原では我が物顔で横行する「いろは組」という男たちの集団に所属する「虎の七内」「熊の武兵衛」の兩人を、三郎四郎は手ひどく懲らしめて評判になった。それゆえ、歌舞伎若衆の中には三郎四郎を後ろ盾に頼み、兄弟契約を結ぶ者はその数を知らないという有り様であった。結果として、三郎四郎は、毎日兄弟関係を結ぶことが珍しくないという身の上であった。ここでは、三郎四郎が、若年の頃より心が強く、生まれつきの男気ぶりが強調されている。

そのような日々を過ごす中、「柳田久松」という地若衆が心の中にある誠を求めて、自らの命を懸けて三郎四郎に恋をした。三郎四郎は柳田久松と会ったその日に、酒の席で酔っ払った勢いのためか、久松が言った「今宵情のうへは命はそなたへ」という言葉尻をとらえて、彼の真心を試そうとした。そのことが起因となって、久松は自殺をしてしまった。三郎四郎は悔恨と自責の念にさいなまれ、跡を追って自殺をしようとしたが、果たしはしなかった。

- (iii) 「世の人しらぬしにをするかな」では、三郎四郎が長い間、病気を患い、収入も少なくなっていた。三郎四郎が頼りにしていた室町西行桜の町に住んでいる「綿九大臣」が勘当された挙句に、駈落ちをしてしまい、お墨付の83両の手形が不渡りになってしまった。それが原因であったためか、三郎四郎は貞享4年(1687)12月27日に割腹自殺を果たしてしま⁽⁴⁵⁾った。法名を「雲山一風」として、「三条の金光寺」⁽⁴⁶⁾に葬られたとされる。

(2) 『嵐無常物語』⁽⁴⁷⁾ 下巻

- (i) 「客はしらぬ精進するかな」では、「早雲長吉座」に所属する三郎四郎が自殺したことによる急変を受けて、代役として三郎四郎の生き移しといわれる藤田伝吉が配役されることになった。続いて、藤田伝吉によって、三郎四郎の最期をありのままに仕組んだ歌舞伎狂言が上演された。三郎四郎を慕い焦がれて芝居に詰めかけた女たちはその芝居を観て、初めて三郎四郎の死を知らされて、外をはばからず泣き出すという始末であった。

また、八坂祇園町の遊女たちまでもが「ひと七日、二七日、三五日、四十九日」に精進を続けるという度が過ぎた見栄を張るようになっていたため、その日については誰も床入れすることがなかった。それゆえ、一夜を明かすことになった客たちは大迷惑であった。

- (ii) 「親仁はしらぬ床入するかな」では、島原おいて太夫の大臣(客)である両替町近くに住む70歳過ぎの老人が訪れた。太夫は三郎四郎の想いが離れないため、この老人に三郎四郎風の角前髪^{とこ あいだ}の鬘^{かへ}をかけさせ、「床の間は名も三郎四良さまと替^{かへ}て、嵐にもてじ」と、太夫は老人のことを嵐三郎四郎であると思い込むことによって、抱いて寝たとうである。

- (iii) 「むかしはしらぬ癡子見るかな」では、ある酒屋の夫婦はとても仲が

悪かった。原因は女房が夫を憎んでいたからであるが、それでも旦那は忍耐と寛容の日々を過ごしていた。ところが、3年経ったある日、急に女房の態度が変わった。女房は、旦那を気遣い、隠居の義母にも親孝行を尽くし、家庭を大事にするようになった。

実は、女房はこの家に嫁ぐ前の娘時代から三郎四郎に夢中であり、手習いの娘友達6、7人と言い合わせて、手首の見えない所に三郎四郎と同じように「三の字」の入れ墨を草子綴じの錐により彫り入れているのである。それが、三郎四郎が自殺した日から、憑き物が落ちたように我に目が覚めたのであった。京都中の人妻や娘にとって、三郎四郎がどれほど恋の邪魔をしたことか、また連れ添う男も三郎四郎のおかげでどんなに不利益を受けたことか、についての内容が記されている。

- (iv) 「浮世としらぬ酒を呑むかな」では、高瀬川の東側に素人女の出逢い宿があり、三郎四郎も生前たびたびこの女宿に呼ばれたことがあったらしい。

ところで、三郎四郎が亡くなってしばらく経ったある日、三郎四郎がかねてこの家の2階に預け置いた「半櫃」⁽⁴⁸⁾が突然動き出し、屋鳴りと振動することがおびただしかった。その「半櫃」を開けてみると、多くの女たちの切れた指、肉のついたまはがした爪、途中で切った黒髪、誓紙、挿櫛、色々な腰巻などと一緒に1つ1つ品名を記した書き付けが入っていた。

「半櫃」には三郎四郎の御霊が宿していると思われたため、三郎四郎を供養するため、この「半櫃」を高野山まで運び、「新恋塚」という塚を築いて、納めたのである。

この話を聞いた京都の役者仲間たちは三郎四郎の女房果報を羨み、2月25日の彼岸の中日に集まって、三郎四郎を弔うために酒供養をおこなった。

(3) その他の史料

以上が、『嵐無常物語』上巻・下巻の要旨であり、嵐三郎四郎は生前いかに美男として名を馳せていたかが理解できる。

三郎四郎が自殺を果たした原因を、「病気」と「金銭」による苦しみのためと解釈されているが、「柳田久松を自殺に追いやってしまった責任」のためかも知れない。

その他にも、嵐三郎四郎に関連する史料は、数多く存在する（表3参照）。たとえば、①貞享5年（1688）『好色通変哥占』序、②元禄3年（1690）頃『好色四季咄』、③元禄8年（1695）『好色とし男』5ノ1、④元禄8年（1695）頃『好色二人女』上、⑤元禄9年（1696）『好色小柴垣』、⑥元禄12年（1699）⁽⁴⁹⁾『役者口三味線』、⑦元禄13年（1700）『御前義経記』2-2などがある。ここに列挙したすべては、三郎四郎の死後に刊行された史料である。

嵐三郎四郎による割腹自殺は当時の大事件として取り扱われていた。三郎四郎の死後から数年を経ても人々は彼を恋しく想い、同時にその死を悲しみ惜しんだかを窺い知ることができる。そして、それらの内容については、三郎四郎の死後10年以上を経た後も語り継がれていったのである。

3. 「清水寺」「宮崎友禪齋」との関わり

筆者は、嵐三郎四郎に関連する史料の中に、彼が宮崎友禪齋に「白衣観音図」扁額の制作を依頼して、清水寺に奉納したという記述があるかも知れないと思い、それらの史料の中から「清水寺」「宮崎友禪齋」という語句の有無を調べることにした。もしそのような語句を発見できれば、奉納者が三郎四郎であるという仮説を検証できるかも知れないからである。その結果、三郎四郎に関連する2点の史料の中から、「清水寺」についての記述のみを発見することができた。

(1) 貞享5年(1688) 井原西鶴著『嵐無常物語』下巻

前述した『嵐無常物語』下巻の(i)「客はしらぬ精進するかな」⁽⁵⁰⁾の中には、「清水寺」について以下のように記されている。

「其後正月廿九日に、千本通立賣に、商人のむすめ、能絹^{よききぬ}を唐染^{からぞめ}にして、京そだちの仕出し、後つき^{うしろ}にうまひ所有。近所のむすめ友達さそひて、早雲^{はやぐも}がはやり芝居を見にゆきけるが、其かへるさに、ひとりぬけて清水のぶたひより飛^{とび}て、身は木ずゑにかゝり、うきめを諸人^{しよにん}に見せける。是も三郎四良をなげきて、かくは成行けると、沙汰し侍る」とある。

上記を意識すると、「貞享5年(1688)1月29日に、千本通立売の商人の娘が、上等な絹を唐染にして身に着け、京育ちのおめかしをしたためか、その後ろ姿に色気があった。近所の娘友達を誘って、嵐三郎四郎に関する追善興行をしている早雲長吉座へ当たり芝居を見に行った。その帰る途中に、一人群れから離れて、清水寺の舞台から飛び落ちて、梢にひっかかり、憐れな憂き目を人々に曝してしまった。これも三郎四郎の死を嘆いて、後追いしたために、このようになってしまったのだという評判がもっぱらであった」という内容である。

「清水のぶたひより飛⁽⁵¹⁾て」という文言より、清水寺所蔵の『成就院日記』に上記のような内容が残されているかも知れないと思い、調べることにした。しかし、『成就院日記』には、元禄7年(1694)以降の記録しか残されていないため、貞享5年(1688)の記録は存在しなかった。『嵐無常物語』には、嵐三郎四郎と清水寺についての内容が記されているが、宮崎友禅斎や「白衣観音図」扁額を奉納したことに関する内容は記されていない。そのため、娘が「清水のぶたひより飛⁽⁵²⁾て」ということと、清水寺奥の院に掲げられた扁額との因果関係については不明である。

(2) 元禄3年(1690) 頃刊『好色四季咄』

元禄3年(1690) 頃刊『好色四季咄』3-2の中に、嵐三郎四郎と「清水

寺奥の院」ととの関係を裏付けるような内容があり、次のように記されている。

「此嵐三郎四郎といふは、京芝居の立役者、美男といふばかりなく、諸人ともににくまぬ役者にてありしが、二三年いぜんにはかなくなりぬ（中略）○嵐三郎四郎についてはなしあり、美男なるによつて、いふかいわぬか、此人にほれぬ女なし。さるによつて、死してのち誓願寺・清水奥院の水むけ、其外千日・万日・開帳のぜんのつなに、いづくの女ともしれず改名かひてつけるもの、いく千万といふかぎりなし」とある。

上記を意識すると、「嵐三郎四郎が生前に京都で活躍した立役者であり、美男であるため、惚れない女性はいなかったばかりでなく、多くの人々にとって憎めない歌舞伎役者であった。しかし、三郎四郎は2、3年前に他界してしまった。三郎四郎の死後も多くの人々が誓願寺や清水寺奥の院に彼の御霊に水を供えて冥福を祈った。その他、千日・万日供養やご開帳の際に仏と縁を結ばせるため、仏像の右手にかけた5色の綱引きを行う者や、どこの女ともわからないが雲山一風という戒名を書いて供える者など幾千万という人々では済まなかった」という内容である。

「誓願寺」に関する記述は、前掲したⅣ－2－（1）『嵐無常物語』上巻－（iii）の中で嵐三郎四郎が割腹自殺を果たした後に「雲山一風」という戒名により葬られた「三条の金光寺」と関わりがあるのではないかと思い、誓願寺に調査を依頼した。誓願寺から拝受した回答には、誓願寺と「金光寺」「嵐三郎四郎」「雲山一風」のすべてにおいて関わりがないというものであった。⁽⁵⁴⁾したがって、誓願寺と嵐三郎四郎は直接に関わりがないようである。⁽⁵⁵⁾

「清水奥院」に関する記述は、嵐三郎四郎が清水寺に「白衣観音図」扁額を奉納した後に、「清水寺奥の院」の軒下に扁額が掲げられたことに起因しているように思われる。『好色四季咄』には、「清水寺」と記されているのではなく、「清水奥院」と記されていることに嵐三郎四郎と扁額の関わりを感じさせる。そのように考えると、嵐三郎四郎は清水寺に奉納するため、宮崎友禪齋に「白衣観音図」扁額の制作を依頼したということへの真実性が増してくる。

ところで、『好色四季咄』は、嵐三郎四郎が貞享4年（1687）12月27日に割腹自殺を行った数年後に出版された史料である。前掲したⅡ－1における「東山名所図」屏風（図2～4参照）は、「清水寺奥の院」の軒先に「白衣観音図」扁額を掲げられた様子も描いている長沢蘆雪が制作した安永7年（1778）6月の作品である。その制作年と『好色四季咄』の刊行年を考え合わせると、「白衣観音図」扁額は、蘆雪が「東山名所図」屏風を制作した年より約90年以上前には「清水寺奥の院」に掲げられていたと推測することができる。したがって、蘆雪が「東山名所図」屏風を制作した頃には、「白衣観音図」扁額は既に彩具の剥落や退色が起っていたのであろう。

V. おわりに

筆者は宮崎友禅斎筆「白衣観音図」扁額の右下部分にある署名の拡大写真（図8参照）を用いて考察することによって、「奉納者である歌舞伎役者名」が「嵐三郎四郎」であると推察した。その理由として、扁額の拡大写真により判読できそうな「文字間隔」「文字数」を考え合わせると、実際に「嵐三郎四郎」という文字が整合するように思えたからである（図10参照）。

嵐三郎四郎が清水寺に「白衣観音図」扁額を奉納したという前提で考えると、三郎四郎は、清水寺のご本尊である「清水型十一面千手観世音菩薩」のご利益を授かるために、宮崎友禅斎に「白衣観音図」扁額を制作させたのかも知れない。それには、三郎四郎が貞享1・2年（1684・1685）頃に柳田久松を自殺に追いやった責任が絡んでいるからであろうか。または、三郎四郎が貞享4年（1687）の夏以前より病気がちであったことや金銭上に問題があったことにより、自らの息災延命や金銭成就を願ったためであろうか。いずれにしても、清水寺の観音信仰と関係して、三郎四郎は何らかの祈願や報謝のために「白衣観音図」扁額を奉納したのであろう。

同じく、嵐三郎四郎が清水寺に「白衣観音図」扁額を奉納したという前提で考えると、宮崎友禅斎は享貞1年（1684）～貞享4年（1687）頃に扁額を

制作したように思われる。友禪斎が31歳～34歳頃であり、彼が「絵扇」や「絵小袖」で一世風靡をしていた頃である（表2参照）。貞享5年（1688）友盡斎清親著『友禪ひいながた』4巻『友禪繪』⁽⁵⁷⁾には、宮崎友禪斎による意匠が「絵扇」「絵小袖」だけでなく、針箱や櫛、盃などの様々な身の回り道具に施した図版が掲載されている。友禪斎はこの数年前である貞享初期に、「絵扇」「絵小袖」を制作する合間に、「白衣観音図」扁額を制作したのであろう。但し、貞享4年（1687）頃に友禪斎が扁額を制作したと考える場合、この頃の三郎四郎は財力が乏しかったと思われるため、友禪斎は無報酬に近い形式で扁額の制作に取り組んだのかも知れない。そのような場合も含めて、友禪斎と三郎四郎の間には文化的交流などにより、おそらく交友関係にあったように思われる。なぜなら、お互い同じ頃に人気を博していただけでなく、活動拠点も近く、年齢差も9歳くらいであるためである。交友関係にあったからこそ、三郎四郎は友禪斎に「白衣観音図」扁額の制作を依頼したのかも知れない。

最後に、本稿で論じてきた清水寺が所蔵する宮崎友禪斎筆「白衣観音図」扁額については、同じく清水寺が所蔵する「清水寺参詣曼荼羅」⁽⁵⁸⁾（府指定文化財）のように、最新の「赤外線撮影」を行えば、おそらく「奉納者である歌舞伎役者名」の形跡が特定できるであろう。また、赤外線やストロボなどによる作品を劣化させる可能性がある光源を使用しなくても、最新の写真撮影機器を利用すれば何らかの形跡が特定できるかも知れない。しかし、まずは何よりも清水寺において「白衣観音図」扁額の現物を拝見できることを願う。⁽⁵⁹⁾

今回の論文執筆にあたり、多くの方にお世話になった。特に以下の4名の方々に感謝の意を表したい。株式会社便利堂から宮崎友禪斎筆「白衣観音図」扁額の写真を拝借する際に仲介ならびに許諾に応じて下さった北法相宗音羽山清水寺・執事補の大西英玄氏、「白衣観音図」扁額の全体写真だけでなく署名部分の拡大写真の貸出にも応じて下さった株式会社便利堂・営業本部の庄司睦氏、「白衣観音図」扁額の写真を株式会社便利堂から拝借することに関する助言ならびに論文の指導をいただいた京都産業大学文化学部教授の鈴木久

男先生、筆者が宮崎友禅斎に関する研究を行った当初から論文の指導をいただいた京都産業大学文化学部教授の宮川康子先生に深く感謝申し上げる。

注

- (1) 「小袖」「キモノ」という呼び名は、両方とも、桃山時代・江戸時代・明治時代前半を通じて存在しているが、研究者の間では、明治時代以降のものを「キモノ」、それ以前を「小袖」と呼び分けるのが通例となっている。『特別展 京の小袖－デザインにみる日本のエレガンス』林智子（京都文化博物館・毎日新聞社 2011）11頁]
 - (2) 『宮崎友禅斎と友禅染』拙稿（「京都産業大学日本文化研究所紀要 第19号」2014）〔325・357〕頁に記述したように、本稿で用いた「挿し彩色」という用語は、一般的に用いられる「挿し友禅」「友禅」「色挿し」「彩色」などの用語と同様の意味で記した。
 - (3) 前掲書『宮崎友禅斎と友禅染』拙稿（「京都産業大学日本文化研究所紀要 第19号」2014）〔324～366〕頁。
 - (4) 「曹洞宗祥雲山龍国寺」の所在地は、石川県金沢市東山2-25-72。
 - (5) 『宮崎友禅斎と友禅染－友禅斎の墓石について－』拙稿（「京都産業大学日本文化研究所紀要 第20号」2015）〔8～63〕頁。
 - (6) 著作物として、(1)『餘情ひなかつた』は元禄5年（1692）友禅斎が39歳頃に著した書物である。6巻構成で、各巻とも40図の合計240図の模様が描かれている。(2)『和歌物あらかい』は『餘情ひなかつた』と同じく元禄5年（1692）友禅斎が39歳頃に著した書物である。3巻から構成されていて、和歌に対する挿絵が描かれている。(3)『梶の葉』は宝永4年（1707）友禅斎が54歳頃に梶女が著した書物である。著者の梶女が詠んだ和歌に対して、友禅斎が挿絵を描いた上中下の3巻からなる歌集である。和歌数118首に対して挿絵69図が描かれている。
- 作品として、(1)自画像「無漏無主寶國行人友禅斎圖」は画風から友禅斎が晩年に描いたのではないかとされる作品である。(2)清水寺所蔵「白衣観音図」扁額は制作年が不明であり、本稿の主題である。
- (7) 「北法相宗音羽山清水寺」の所在地は、京都市東山区清水1丁目。
 - (8) 「白衣観音」とは、「胎藏界曼荼羅観音院の外列最下に位置する観音。三十三観音の1つともされる。大白衣観音」のことである（『スーパー大辞林』参照）。また、「吉祥を表す観世音菩薩で、中世以降は三十三観音の1つとされた。息災延命や安産、育児などの祈願の本尊に用いる。一面二臂、肉身白黄色、白衣を

まとう。本来白の蓮華上に座すが、禪宗では水辺の岩上に座した姿で水墨画の好画題となる。牧谿筆（大徳寺）、能阿弥筆（溝口家）などが著名」とある（『百科事典』参照）。

- (9) 『絵馬－清水寺』土居次義（清水寺 1981）10頁には、「扁額（＝大絵馬）」について次のように詳しく記されている。「大絵馬は扁額ともよばれ、額縁形式のもので、中にはその縁が金具の装飾をもつ派手なものもある。その大きさは多種であるが、特に人々が豪華さを好んだ16世紀後半から18世紀前半にかけてのころ（桃山時代から江戸時代初期）の大絵馬には、屏風画にも劣らないような大作も生まれている。このような大絵馬にも馬が描かれたことはいうまでもないが、それ以外の多種の画題も扱われ、特に武人の奉獻によるものには歴史上有名な勇士を題材とする所謂武者絵が多い。またそのほか海外貿易を行った富商が奉納した渡海船を描くものもあって、風俗画としても興味深い作品も見出される。

このような大絵馬もひろく流行したので、今でもその分布は全国に及んでいるが、京都は久しく都であっただけにそれを伝える社寺も多く、中でも清水寺、八坂神社、北野天満宮、今宮神社、伏見稲荷大社、安井金比羅宮などは有名である」

- (10) 筆者は、宮崎友禪齋に関する研究を行うにあたって、平成24年を最初に清水寺に対して友禪齋筆「白衣観音図」扁額の「赤外線撮影」を依頼して、「奉納者である歌舞伎役者名」の解説協力を願い出た。しかし、清水寺からは、「赤外線撮影」は作品の劣化が生じる可能性があるとして許可されず、未だに現物を拝見すらできていない。その後も、清水寺に対しては替わりに拝借できる資料を願い出たが、「白衣観音図」扁額が掲載された書物である土居次義著『絵馬－清水寺－』の複写を拝受しただけで、特別の進展がなかった。

その時に担当してくださった方が、数年前に他界された加藤眞吾氏である。加藤氏は清水寺の学芸員であり、『清水寺の謎 なぜ「舞台」は造られたのか』（祥伝社黄金文庫 2012）の著者でもあった。加藤氏と初めてお会いした平成24年（2012）2月中頃に、「『白衣観音図』扁額は清水寺の大講堂内にある「宝蔵殿」に保管されており、現在見ることはできない」と仰せられた。しかし、2度目にお会いした同年11月初めには「本堂に『白衣観音図』扁額が掛かっているの、探してみてください」と仰せられ、拝観券をいただいたことがある。清水寺本堂はうす暗く、「白衣観音図」扁額らしきものがないかと何度も確認したが、見つめることができなかった。したがって、現在、「白衣観音図」扁額の所在そのものが不明であるのかも知れない。

- (11) 筆者は『絵馬－清水寺－』の製作元である「株式会社便利堂」に、「白衣観音図」扁額の写真が存在するかも知れないと思い、平成27年（2015）8月末頃、

京都産業大学文化学部教授の鈴木久男先生にその旨を相談した。鈴木先生からは、「便利堂さんの写真は、プロの方が撮影しているので、重要文化財になるようなものがあるくらい品質がいいです。もし、お借りできるのであれば、是非お借りした方がいいです」と助言をいただいた。

そこで、同年9月初めに、「株式会社便利堂」に、「白衣観音図」扁額の写真貸出を依頼した。「株式会社 便利堂」からは、写真の貸出にあたり、所蔵元である清水寺の許諾が必要という回答をいただいた。

筆者は、清水寺から許諾をいただくにあたり、同年9月29日に開催された「第13回 京の伝統工芸士の集い」で相談できればと考えた。なぜなら、その集いの基調講演に清水寺貫主・北法相宗管長である「森清範猷下」が講師として招かれていることを予め知っていたからである。当日「森清範猷下」は、講演後の懇親会にも出席されることを、事務局の方から事前にお聞きしていたので、懇親会では写真貸出の許可を得るための機会を窺っていた。しかし、「森清範猷下」の周りには、常に人ばかりでお話しする間合いが難しかった。

そこで、「森清範猷下」と一緒にお越しいただいた付き添いの僧侶に、思い切って相談してみた。その僧侶が仰せられるには、清水寺に依頼したことで一度不許可となった事柄は、基本的に覆ることはないという前置きがあったが、今回の依頼に関しては少し観点が異なるため、一度寺に持ち帰って責任を持ってご回答しますという返事をいただいた。最後に名刺交換をしたところ、その付き添いの僧侶は清水寺・執事補の大西英玄氏であった。家に帰ってインターネットで調べてみると、大西英玄氏は清水寺・前貫主・故大西良慶氏の孫にあたる方の方である。2・3日後に、大西英玄氏から快い許諾のお電話をいただいた。

結果として、同年10月中頃に「株式会社便利堂」より「白衣観音図」扁額の写真2点を拝借することができ、扁額の研究を進展させることができた。

- (12) 本稿は、平成28年2月27日（土）に宮津市中央公民館小会議室で開催された「第6期上席特別客員研究員研究報告会」において筆者が発表した「宮崎友禪斎と友禪染－友禪斎筆「白衣観音図」扁額（清水寺所蔵）について－」を基に、加筆・修正した内容を論じた。「宮津市中央公民館（みやつ歴史の館）」の所在地は、京都府宮津市宇鶴賀2164。
- (13) 前掲書『絵馬－清水寺』土居次義（清水寺 1981）124頁～125頁には、発見された当時の扁額について、次のような内容が記されている。「白衣観音図」扁額は、板地画面に描かれた著色画であるが、彩具の剥落、退色がひどく、辛うじて図様の大体と作風のおおよその特色がうかがい得られる作品である。画面を見ると、中央より少し左寄りに大きな岩があつて、その上に白衣観音が正面向きに正座されている。その衣の裾は長く垂れ下がっており、観音の背後には

「頭光」と呼ばれる光背が頭部に表現されている。観音の背後に向かって左側上方には大きな滝が落下する状態が見られ、その水は画面より向かって右側の岩間から急流になりながら落ちていって、画面下側で激しく波打っている。また、同書にはその作風について、「狩野派的な特色を中心として光琳風の装飾的要素が加味されているようだが、観音の表現には京狩野の山雪や永納を想起せしめる点がある」と記されている。

- (14) 明石国助〔染人〕(あかし くにすけ〔せんじん〕、1887-1959)は、明治-昭和時代の染織工芸研究家。明治20年5月6日生まれ。明石博高(ひろあきら)の3男。母校京都高等工芸(現京都工芸繊維大)の助教授をへて鐘淵(かねがふち)紡績にはいる。戦後、母校や京都市立美大の講師、文化財保護委員会専門委員などをつとめた。昭和34年1月27日死去。71歳。京都出身。号は染人。著作に「日本染織史」など。(「コトバンク」より転載・加筆)
- (15) 土居 次義(どい つぎよし、1906年 - 1991年11月24日)は、日本の美術史学者。専門は 日本美術史。京都工芸繊維大学名誉教授、京都新聞文化賞、紫綬褒章、京都府文化賞 特別功労賞、京都市文化功労賞、授与。元京都国立博物館館長。(「Wikipedia」より転載)
- (16) 野間 光辰(のま こうしん、1909年11月 - 1987年4月30日)は日本の国文学者。号は般庵。京都大学名誉教授。専門は近世日本文学で、井原西鶴研究の第一人者。大阪府 出身。(「Wikipedia」より転載)
- (17) 長沢蘆雪が描いた「東山名所図」屏風(六曲一隻)は、材質が紙本・墨画淡彩・銀箔によるものであり、寸法が縦166.0cm、横342.0cmという大きさである。「東山名所図」屏風に関する参考文献として、①『長沢芦雪 奇は新なり』MIHO MUSEUM編(MIHO MUSEUM 2011)22~23頁、256~257頁、271~272頁、302頁、304頁、②『別冊太陽 日本のこころ181 長沢芦雪』狩野博幸(平凡社2011)46~47頁、171頁、③『日本の美術 第219号 長澤蘆雪』宮島新一編(至文堂 1984)「修行時代」の頁、④前掲書『絵馬-清水寺-』土居次義(清水寺1981)125~126頁、⑤『蘆雪二題 鵜飼図、東山真景図屏風』土居次義(『季刊アート 20』マリア書房 1972)72~74頁などがある。なお、土居次義氏は、「東山名所図」屏風を「東山真景図」屏風と表現している。
- (18) 「東山名所図」屏風に描かれている寺社の名称については、『京都・観光文化時代MAP』新創社編(光村推古書院 2006)18頁「幕末・維新地図」などを基に記した。
- (19) 前掲書『蘆雪二題 鵜飼図、東山真景図屏風』土居次義(『季刊アート 20』マリア書房 1972)73頁
- (20) 前掲書『清水寺の謎 なぜ「舞台」は造られたのか』加藤真吾(祥伝社黄金文庫 2012)、『京都清水寺門前ガイド&イラストマップ』(清水寺門前会)など

には、「清水寺の堂塔伽藍配置図」のイラストが掲載されている。

- (21) 前掲書『絵馬－清水寺－』土居次義（清水寺 1981）125頁
- (22) 前掲書『絵馬－清水寺』土居次義（清水寺 1981）125～126頁には、「白衣観音図」扁額について次のように記されている。「その奥の院を見るに、ひじょうに興味深いことに、その軒下に西面して5面の絵馬の掛けられている様子がはっきり写されているのだが、そのうち向かって左方より2枚目こそ友禪の白衣観音図であることが、その画面の図様から知られるのである。『拾遺扁額要覧』の清水寺奥の院の条に、絵馬として白衣観音図の他に僧祐識筆の「海」字額、長谷川雪朝筆の金剛競腕図、通商船図が挙げられているが、東山真景図の奥の院の部分には、「海」字額と金剛競腕図とが、やはり軒下に西面して掲げられている様子が描かれている。ただし、この屏風の部分に写されている絵馬が、現在は見られず、一応友禪の作だけの存在が知られているわけである（中略）なお友禪の白衣観音図がいつ取りはずされたかは明らかではないが、多分明治以降のことではないかと思われる。とにかくも、西日をうける位置にあったのであるから、その保存状態のひじょうに悪いのも当然といわざるを得ない」
- (23) 前掲書『絵馬－清水寺』土居次義（清水寺 1981）129頁注7には、『拾遺扁額要覧』について次のように記されている。「『拾遺扁額要覧』は、弘化2年（1845）に刊行された『山州扁額要覧』の補遺として嘉永元年（1848）に上梓された書であって、両書の奥附によって、叟中晴雲堂（易得子）の編集、梓行にかかることが知られる」とある。
- 筆者は『拾遺扁額要覧』の原本を探してみたが、未だ発見できていない。『山州扁額要覧』の複写は保持しているが、その中に「白衣観音図」扁額に関する記述は見当たらなかった。
- (24) 前掲書『絵馬－清水寺』土居次義（清水寺 1981）123～124頁には、土居次義氏が「白衣観音図」扁額を発見した当時の様子を次のように記している。「私が清水寺に友禪の白衣観音図絵馬があったことを知ったのは、『拾遺扁額要覧』の奥の院の条に『白衣観音 友禪』と録されていることによるのであった。今から28年前の昭和28年（1953）の某日、私は清水寺を訪れ、奥の院の絵馬を点検したが、もちろん白衣観音図は見当たらなかったし、念のため本堂に掲げられている絵馬も見て廻ったが、それと思われるものは見出されなかった。そこで寺務所でおたづねしたところ、釈迦堂の中にとりはずした絵馬が何面か収納されているということが分かったので、お頼みしてそれらの絵馬を拝見させてもらうこととなった。それから間もなく学生の応援を得て釈迦堂の絵馬を1点づつ点検したが、寺の人たちも快く協力して下さったので、ことはスムーズに運んだが、肝腎の友禪の絵馬は、なかなか現れなかった。しかし慎重に1面づつ堂外に運んで調べているうちに、かなりの損傷はあるが、白衣観音を描いた

大絵馬が出て来たのである」

- (25) 『宮崎友禪齋と近世の様染』明石染人（宮崎友禪翁顕彰会 1953）134～135頁には、次のように記されている。「私は3代嵐三右衛門が初代嵐三五郎がこの扁額を寄進した願主ではなかろうか、どうも女形の三右衛門というよりも三五郎（初代）の方が近いように思われる。赤外線写真に依つても願主名がはつきりせないのが遺憾で、それが明瞭になれば友禪がいつ頃まで京師に住んでゐたか、大略わかるのではないかと思うのである。因みにこの扁額は、寄進當時のものと思われその四隅及び上下左右の八個の鍔金具も錆びてはゐるが完存してゐる。寶永、正徳、享保初年頃友禪の50歳以上の代表作とみてよいであろう」とある。

- (26) 本稿注釈（10）参照。

- (27) 『再説嵐無常物語』野間光辰（1964）〔『西鶴新新攷』野間光辰（岩波書店 1981）〕308～309頁には、「白衣観音図」扁額について次のように記している。「端然として巖の上に結跏趺座する白衣観音像の右辺下隅に、

嵐三〇四郎〇

友禪図

と、かすかに文字をとどめてゐる。明石氏は友禪の名を見ることに満足して、奉納の願主には深く留意せらるることもなかつたが、わずかに残る文字から判断して、これは紛れもなく嵐三郎四郎その人である。友禪といへば、延宝末年から画名を發した当時の名手、扇絵やいはゆる友禪模様であまねく世に知られてゐるが、もともと狩野派の本絵を学んだ画人である。その友禪の墨絵の白衣観音像を誂へて清水寺奥の院に奉納した三郎四郎は、果たして何の立願祈誓するところがあつたのであろうか。かの柳田久松自害の砌、三郎四郎心中深く期するところがあつたといふ『嵐無常物語』の件りが思ひ合はせれる。年代不明であるが、私はこれも貞享1、2年頃のことと考へる」とある。

- (28) 野間氏は、宮崎友禪齋筆「白衣観音図」扁額の奉納者が「嵐三郎四郎」であるということを筆者よりも50年以上も前に言及していた。筆者は、「嵐三郎四郎」に関する史料を調べるまで、自身が最初に同内容を推察したと自負していた。それだけに、前掲書『再説嵐無常物語』野間光辰（1964）〔『西鶴新新攷』野間光辰（岩波書店 1981）〕308～309頁における記述に接したとき、非常に衝撃を受け、正直落胆した部分もある。しかし、「再説嵐無常物語」と出合ったことによって、清水寺への奉納者が「嵐三郎四郎」であると確信したことも事実である。

- (29) 『歌舞伎人名事典』野島寿三郎編（日外アソシエーツ 1988）を参照すると、友禪齋が活躍した当時の「嵐」姓で「四郎」と付く歌舞伎役者は、他にも「嵐勘四郎」「嵐三四郎」が存在したようであるが、いずれも文字数が4文字である

ため、「署名」と整合しない。

- (30) 筆者が初めて「嵐三郎四郎」という歌舞伎役者の存在を知ったのは、「紀要第19号」の論文を執筆している平成25年（2013）頃であった。その頃は、「嵐三郎四郎」が「嵐」姓であり、宮崎友禅斎筆「白衣観音図」扁額と関わりがあるかも知れないと思う程度であったため、念のため以下の史料を保存しておいた。『日本古典文学全集39（井原西鶴集2「男色大鑑 巻8」）』（小学館 1973）574頁、600頁。同書600頁には「『男色大鑑』登場役者一覧」という役者事典のような解説があり、「嵐三郎四郎」について次のように興味深い内容が記されている。「嵐三郎四郎：上方役者。寛文3（1663）年生まれで、はじめ江戸の中村勘三郎座で若衆方を勤め、中村勘之介と称していたが、延宝5（1677）年の顔見世に上京して嵐三右衛門座にはいり、嵐三郎四郎と改めて立役となり、美貌と六方とやつし事で人気を博したが、貞享4（1687）年12月27日に色と金のために自殺した。翌元禄元年3月刊の西鶴作『嵐無常物語』『半紙本2冊』は、その最後物語である」
- (31) 前掲書『宮崎友禅斎と友禅染－友禅斎の墓石について－』拙稿（「京都産業大学日本文化研究所紀要 第20号」 2015）〔22頁〕
- (32) 前掲書『宮崎友禅斎と友禅染－友禅斎の墓石について－』拙稿（「京都産業大学日本文化研究所紀要 第20号」 2015）〔34～36頁〕
- (33) 前掲書『宮崎友禅斎と友禅染－友禅斎の墓石について－』拙稿（「京都産業大学日本文化研究所紀要 第20号」 2015）〔22頁〕
- (34) 前掲書『歌舞伎人名事典』野島寿三郎編（日外アソシエーツ 1988）33～34頁には、「嵐三郎四郎」について初代・2代・3代・4代目までの解説が記されている。ここでは初代のみの記述を取り上げる。「嵐三郎四郎（初代）：座元？～貞享4年（1687）活貞享3～4 紋八角に小の字 貞享3（1685）年、京岩本権三郎座の座元として勤めている。4年正月刊『野良立役舞台大鏡』に《六法のふり出し御同名より相伝いたされしゆへにや京にて諸人すぎ給ふ。一ぬれの狂言よくうつるそれは道理わかいもの、一やつし上手のやうにみへてげいに中だるみしてきのどくかゆい所へ手のとゝかぬこゝちする、ふりだしやあらしくくからぬ初時雨》とあり、役者として好評だったらしい」とある。
- (35) 前掲書『宮崎友禅斎と友禅染－友禅斎の墓石について－』拙稿（「京都産業大学日本文化研究所紀要 第20号」 2015）〔22～23頁、27頁〕
- (36) 前掲書『宮崎友禅斎と友禅染－友禅斎の墓石について－』拙稿（「京都産業大学日本文化研究所紀要 第20号」 2015）〔23～24頁、46頁〕
- (37) 前掲書『宮崎友禅斎と友禅染－友禅斎の墓石について－』拙稿（「京都産業大学日本文化研究所紀要 第20号」 2015）〔10～12頁、24頁、46～48頁〕
- (38) 本稿注（6）参照。前掲書『宮崎友禅斎と友禅染－友禅斎の墓石について－』

- 拙稿「京都産業大学日本文化研究所紀要 第20号」2015〕〔22頁、53頁注(29)〕
- (39) 筆者は、「初代・嵐三郎四郎」に関連する史料について調べていた中で、前掲書『再説嵐無常物語』野間光辰(1964)〔『西鶴新新攷』野間光辰(岩波書店 1981)〕の存在を知った。同書308～309頁には、著者である野間光辰氏が、宮崎友禪斎筆「白衣観音図」扁額の奉納者が「嵐三郎四郎」であると断言していることを発見した。本稿注釈(28)参照。
- (40) 『嵐無常物語』上・下巻を掲載している史料には、『定本西鶴全集 第6巻・第11巻下』(中央公論社 1959・1975)、『対訳西鶴全集4』(明治書院 1978)などがある。
- 筆者は、嵐三郎四郎について書かれた『嵐無常物語』の存在を、本稿脚注(30)にも記しているように貞享4年(1687)井原西鶴著『男色大鏡』の史料を探していたときに発見した。
- (41) 「嵐三郎四郎」の略歴については、前掲書『対訳西鶴全集4』(明治書院 1978)の中にある『嵐無常物語 上』250頁の注釈を基にまとめた。
- (42) 「六法」とも書き、歌舞伎演技の一形式。荒事芸の一つで、歩く動作を様式化したもの。初めは出の芸として、現在では引っ込みの芸として演じられる。「飛び六方」「丹前六方」など種類が多い。古くは、「丹前」「だんじり」などとも呼ばれた(『スーパー大辞林』参照)。
- (43) 「立役者」のことで、芝居で一座の中心になる役者。「立者」とも呼ばれる(『スーパー大辞林』参照)。
- (44) 前掲書『対訳西鶴全集』(明治書院 1978)240～270頁、前掲書『再説嵐無常物語』野間光辰〔『西鶴新新攷』野間光辰(岩波書店 1981)〕292～298頁を基に要旨をまとめた。
- (45) 「雲山一風」という戒名は、「嵐」という文字を分解して、「山」と「風」を含めたものとされる。前掲書『対訳西鶴全集4』(明治書院 1978)270頁参照。
- (46) 「三条の金光寺」については、場所だけでなく寺の存在そのものが不明である。但し、現在も「金光寺」という時宗市屋派の寺は、「京都市下京区六条通河原町西入本塩竈町556」に存在する。フリー百科事典(Wikipedia)などによると、現在の「金光寺」は、「天正19年(1591)豊臣秀吉の命により現在地に市比売神社と共に移転した」とされる。
- また別の内容として、「三条の金光寺」について、前掲書『再説嵐無常物語』野間光辰(1964)〔『西鶴新新攷』野間光辰(岩波書店 1981)〕296頁には次のように記されている。『絵合 好色四季咄』(元禄2・3年頃刊行)には、『三郎四郎が石とう、大りうじとて四□□□に行みちばたにあり』(3ノ2)と記す。四条御旅町の浄土宗大竜寺ならば、元禄14年11月25日京都顔見世出演のために上洛急死した、2代目嵐三右衛門法名西岸道谷信士を葬った寺であり(『嵐都の

土』)、三郎四郎の墓碑があつたとしても不思議でないが、残念ながら同寺は屢次の火災と境内縮小のため、三郎四郎の過去帳・石塔ともに失われて今はない』とある。前掲書『対訳西鶴全集4』(明治書院 1978) 270頁には、「大竜寺」について次のように記されている。「これは黒谷の金戒光明寺の末寺であるので、西鶴の何かの誤りで金光寺としたか」とある。

さらに別の内容として、「三条の金光寺」について、前掲書『嵐三郎四郎をめぐって』〔『西鶴論叢』野間光辰(中央公論社 1975)〕433頁には次のように記されている。「野間先生は、三条白川橋東の金剛寺かという試案をだされたが、もう1つ寺町三条上ル金剛寺(今の矢田寺)の可能性もある」

- (47) 前掲書『対訳西鶴全集』(明治書院 1978) 272~298頁、前掲書『再説嵐無常物語』野間光辰〔『西鶴新新攷』野間光辰(岩波書店 1981)〕298~302頁を基に要旨をまとめた。
- (48) 長櫃の半分くらいの大さの櫃(ふたが上に開く大形の箱)で、衣類・夜具などを入れる(『スーパー大辞林』参照)。
- (49) 前掲書『再説嵐無常物語』野間光辰(1964)〔『西鶴新新攷』野間光辰(岩波書店 1981)〕297~298頁には、以下に記した7点の史料の中に、嵐三郎四郎が割腹自殺を果たしたことや、美男で名を馳せていたかについての内容が記載されている。
 - ①『好色通変哥占』序には、「下女も上郎も首長なる、河原の嵐が切腹しも、借錢をこいの道といえ、そこの万日、この別事の袋には、雲山一風」とある。
 - ②『好色四季咄』については後述する。
 - ③『好色とし男』5ノ1には、「四条川原の立役者、あらし三郎四郎がぬれの狂言身にこたへて、(中略)かあいや此男はよしなき事に死うせて」とある。
 - ④『好色二人女』上には、「さてもさてもよにかほどつくい^{いと}らしい人も有るものかな、過しどうとんぼりのたちやくしやあらし三郎四郎をこそ、ずいぶんならびなひおとこじやとおもへば、又あのようなうつくしいおわかい人のござることよ」とある。
 - ⑤『好色小柴垣』には、「只今出ました女方は何と申すぞ、嵐三郎四郎はでませぬかと、六七年さきに死だものをしたはるゝは、すこし恋けの有しやと、下心にくらしく」とある。
 - ⑥『役者口三味線』には、「是は町のむすめ内儀後家がた、三郎四郎此かたの、男つきよきに見とれ、めつたによいといふを」とある。
 - ⑦『御前義経記』2-2には、「よくよくみれば御そだちやしからず、殊に一藝のほまれたゝ人ならぬ御きりやう、嵐三郎四良にひとしく」とある。
- (50) 前掲書『対訳西鶴全集4』(明治書院 1978) 275~276頁。

- (51) 『清水寺成就院日記 第1巻』清水寺史編纂委員会 委員長 森清範（法蔵館 2015）411頁には、『成就院日記』について次のように記されている。「『成就院日記』は、清水寺の僧坊の1つである成就院によって「門前境内」の町々を管轄するための記録として書き継がれた日記である。現在、途中欠ける部分があるものの元禄7年（1694）から文久4年（1864）までの約170年分が冊子の形状で210冊残されている」とある。

『実録「清水の舞台より飛び落ちる」－江戸時代の『清水寺成就院日記』を読む－』横山正幸編（荒川印刷 2000）283～291頁には、『成就院日記』について、次のような内容が記されている。元禄7年（1694）から元治元年（1864）の171年間で、23ヶ年が欠けており、148ヶ年分の日記が現存している。この148ヶ年の日記の中で「舞台より飛び落ち」事件が234件あり、その中には「乱心者」の娘が2回飛び落ちているため、実際は233人が飛び落ちたようである。なお、死亡者は、233人中34人であり、その率は14.6%と少なく、10代の者はほとんど存命している（93.7%）。

- (52) 前掲書『再説嵐無常物語』野間光辰（1964）〔『西鶴新新攷』野間光辰（岩波書店 1981）〕297頁。筆者は、『好色四季咄』に関する原本の複写を部分的に保持しており、全文が掲載されている原本を探している。

『好色四季咄』は元禄3年（1690）頃に刊行されており、「春夏秋冬」の4巻からなり、各巻に3話ずつの合計12話の好色ばなしが収められている。『好色四季咄』3-2は、第8話で、「曲水」という題名のものである。「二つの『好色四季咄』」岡田甫〔『奇書』岡田甫（有光書房 1958）〕55頁、「『好色四季咄』と『心中恋の塊り』」鶴月洋〔『国文学：解釈と教材の研究』8（7）（学灯社 1963）〕127頁、「『好色四季咄』の正體」石川巖〔『西鶴研究資料集成』昭和4年・5年竹野静雄（クレス出版 2010）〕4頁を参照。

- (53) 「浄土宗西山深草派 総本山 誓願寺」の住所は、京都市中京区新京極桜之町453。「誓願寺」の由緒書によると、現在地の寺町三条に移ったのは天正19年（1591）、秀吉の命であった。安永9年（1780）刊行『都名所図会』によると、表門は寺町六角、北門は三条通りに面し、6500坪もの境内に塔頭寺院が18カ寺あり、三重塔もみられた。誓願寺第55世住職・安楽庵策伝上人（1554～1642）は笑話集『醒睡笑』8巻を著し、「落語の祖」と称されている。

- (54) 総本山誓願寺の長谷川晃雄氏から次のように記された回答をメールで拝受した（●は筆者の質問、☆は長谷川氏の回答）。

●「塔頭寺院が18カ寺」の中に、「金光寺」というお寺は含まれていましたでしょうか？ ☆確認させて頂きましたが、上記の中に「金光寺」様というお寺は見当たりません。

●「嵐三郎四郎」または彼の戒名である「雲山一風」という墓地は存在する（存

在した) でしょうか? ☆お調べ致しましたが過去・現在ともに誓願寺墓地に上記の方の墓は見当たりません。

- (55) 誓願寺と嵐三郎四郎の関係について考えられる事柄として、筆者の想像ではあるが、嵐三郎四郎はかつて謡曲「誓願寺」の芝居を演じて当たり役となったのではないか。そのために、三郎四郎の死後、多くの女性が誓願寺へ彼を供養するために参じたのかも知れない。
- (56) 前掲書『清水寺の謎 なぜ「舞台」は造られたのか』加藤眞吾(祥伝社黄金文庫 2012) 167頁には、「清水型十一面千手観世音菩薩」のご利益について、「十一面」は修羅道を救済、「千手」は地獄道を救済し、諸願成就・産生平穏をつかさどることが記されている。また、同書164頁には、「観世音菩薩」について「世のすべてを観、音を聞き救う存在」と記されている。
- (57) 前掲書『宮崎友禅斎と友禅染』拙稿(「京都産業大学日本文化研究所紀要 第19号」 2014) [342~343] 頁参照。
- (58) 平成28年(2016) 5月26日(木)付の京都新聞(夕刊) 1面に、清水寺が所蔵する「清水寺参詣曼荼羅」(府指定文化財)についての記事が掲載された。文化財の保存と継承を目的に、屏風絵などのデジタル保存に取り組む凸版印刷(東京都)と清水寺が協力し、「清水寺参詣曼荼羅」を高解像度で記録したことについて記されている。
- 高解像度で記録し、赤外線撮影した「清水寺参詣曼荼羅」について、次のように記されている。「五条橋に弁慶を描いた可能性があることが26日までに、デジタル保存作業などからわかった。(中略) 赤外線撮影によって目で確認できない背景部分の画像を取得したところ、左隅に描かれた五条橋の一部に紙を貼り直し、修整した形跡が見つかった。(中略) 赤外線撮影で弁慶が見つかった部分は、個人所蔵の曼荼羅に描かれた弁慶の位置と重なる。また、橋の欄干には弁慶が持つ長刀のような形も見える」とある。「清水寺参詣曼荼羅」には、清水寺所蔵と個人所蔵の2点があり、個人所蔵の方にだけ弁慶と牛若丸が登場する。上記と同じように、本稿で論じてきた清水寺が所蔵する宮崎友禅斎筆「白衣観音図」扁額についても、デジタル保存に取り組んでいただけることを切望する。
- (59) 本稿注釈(10)にも述べたが、現在、清水寺に「白衣観音図」扁額の所在そのものが不明であるのかも知れない。筆者は、大講堂内にある「宝蔵殿」に保管されているか、土居次義氏が「白衣観音図」扁額を発見した「釈迦堂」に保管されているのではないかと考える。



図5 明石染人氏が推察する「白衣観音図」扁額右下の署名
：『宮崎友禪齋と近世の模様染』明石染人（宮崎友禪翁顕彰会 1953）を基に筆者作成



図6 土居次義氏が推察する「白衣観音図」扁額右下の署名
：『絵馬一清水寺一』土居次義（清水寺 1981）を基に筆者作成



図7 野間光辰氏が推察する「白衣観音図」扁額右下の署名
：『再説嵐無常物語』野間光辰（1964）
〔『西鶴新新攷』野間光辰（岩波書店 1981）〕を基に筆者作成



図8 宮崎友禅斎筆「白衣観音図」扁額（清水寺所蔵）【写真提供 株式会社便利堂】

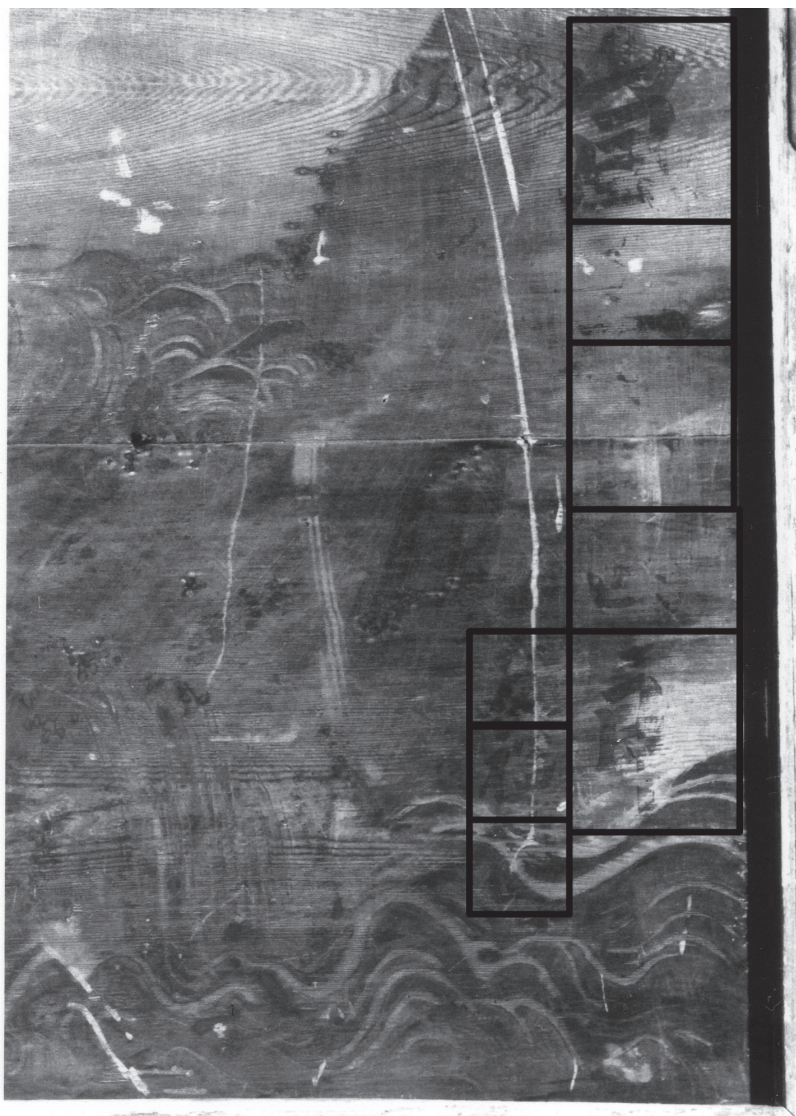


図9 宮崎友禪斎筆「白衣観音図」扁額（清水寺所蔵）【写真提供 株式会社便利堂】
〔署名部分を□で区切って、判読を試みた〕

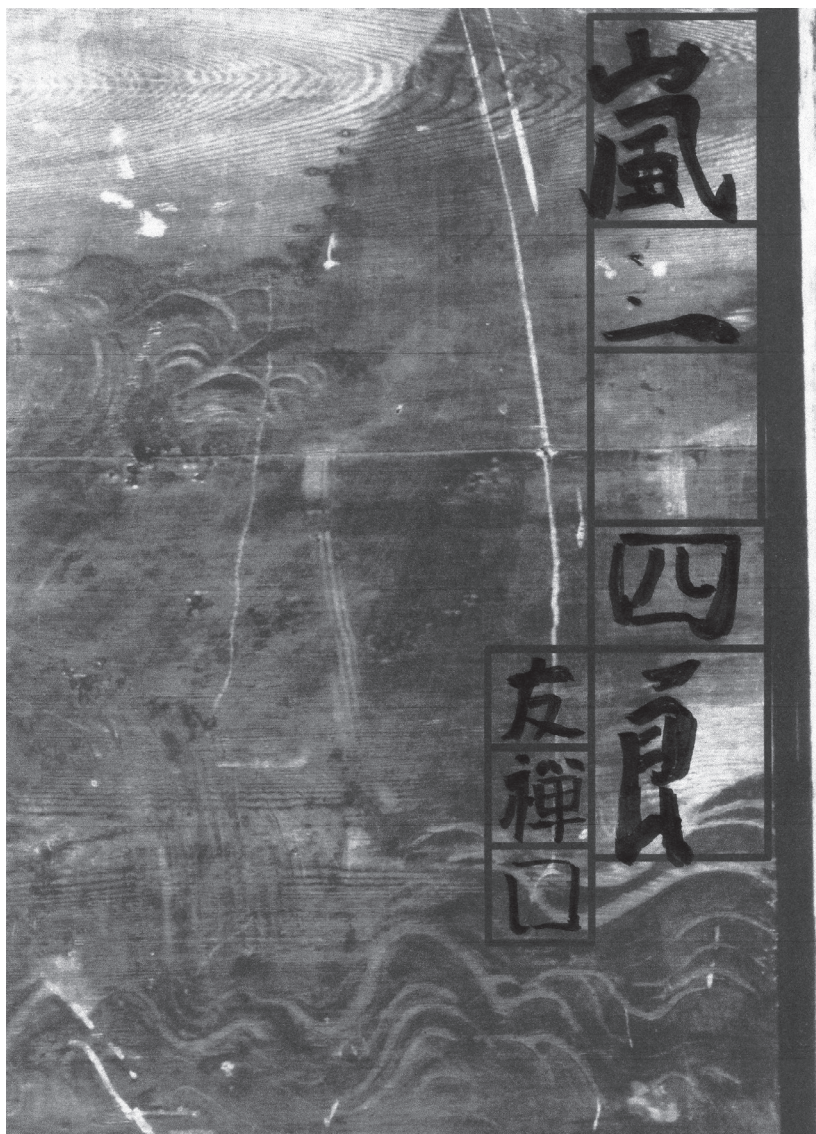


図10 宮崎友禪斎筆「白衣観音図」扁額（清水寺所蔵）【写真提供 株式会社便利堂】
〔署名部分を□で区切って、筆者が筆ペンで判読できる文字をなぞった〕

表1 「白衣観音図」扁額を奉納した可能性がある嵐姓の歌舞伎役者

〔歌舞伎役者名〕	〔生没年月日〕	〔享年〕	〔活動時期・期間〕	〔略伝〕
初代・嵐三右衛門	寛永12年(1635)～元禄3年(1690)10月18日	56歳	寛文10年～貞享3年(1670～1686)〔17年間〕	鈴木平左衛門に私事し、丸に小の字という紋に因んで、「丸小三右衛門」と名乗る。 寛文10年(1671)頃「小波嵐」の立役で因んで、「嵐三右衛門」と名を改める。 延宝初年(1673頃)、京都で座元と立役を兼ねた。
2代・嵐三右衛門	寛文元年(1661)～元禄14年(1701)11月7日	41歳	元禄3年～元禄14年(1690～1701)〔12年間〕	初め「嵐勘太郎」と名乗り舞台に動いたが、延宝末(1680)には「嵐門三郎」と改める。 元禄3年(1690)10月、父の死とともに2代目・嵐三右衛門を襲名した。
3代・嵐三右衛門	元禄10年(1697)～宝暦4年(1754)10月	61歳	宝永元年～宝暦4年(1704～1754)〔51年間〕	2世の実子で、宝永元年(1704)8歳で「3代目・嵐三右衛門」を襲名する。 延享2年(1745)「嵐新平」と改名した。
初代・嵐三五郎	貞享4年(1687)～元文4年(1739)7月12日	53歳	享保8年～元文4年(1721～1739)〔19年間〕	幼名を「熊五郎」と名乗った後、嵐四郎の門人となり「嵐三五郎」と名乗った。 その後、3代目・嵐三右衛門の門人となり活躍した。
初代・嵐三郎四郎	寛文3年(1663)～貞享4年(1687)12月27日	25歳	延宝3年～貞享4年(1677～1687)〔11年間〕	初め「中村勘之助」と称していたが、延宝3年(1677)の観見世に上京して、 嵐三右衛門座に入り、「嵐三郎四郎」と改めて立役となる。 美貌と大方とやつし事で人気を博したが、病氣と借金のために自殺した。
2代・嵐三郎四郎	?～享保2年(1717)2月	不詳	宝永3年～享保2年(1706～1717)〔12年間〕	初め「嵐七二郎」と名乗り、色子として大坂の舞台に動いた。 宝永4年(1707)11月以来、大坂の舞台に動いた。
3代・嵐三郎四郎	不詳	不詳	享保2年～3年(1717～1724)〔8年間〕	享保2年(1717)11月大坂沢村長十郎座「福荷屋敷大黒柱」に子役として、 堀川麿の妹役を動いた。

出展：『歌舞伎人名事典』野島寿三郎編（日外アソシエーツ）などを基に筆者作成

表2 「宮崎友禪の生涯」に関する年表

	（年齢）	（風姓の活動時期）	（『書名』 著者「引用文」など）
承応3年(1654)	1歳(誕生)		
天和2年(1682)	29歳		『好色一代男』井原西鶴 （原）：「唐木細工の根付 扇も十二本拵善が浮世繪」
貞享2年(1685)	32歳		『親久一世の物語』井原西鶴 （小袖）：「しまちりめんの浅黄に白繒子の長羽織に京の幽禪が墨繪の源氏」
貞享3年(1686)	33歳	（初代・三右衛門）	『好色三代男』西村市郎右衛門 （原）：「藤屋が下袴 ゆうぜん扇 音羽かる焼の千菓子 今の世のはやりもの」 （小袖）：「白きひとえの裾に（中略） ゆうぜん扇の絵して彩書きなる 此運平さ心あるべき様様」
			『好色一代女』井原西鶴 （原）：「似世幽禪繪の扇にして涼風をまねき」 （原）：「即影室も物さび幽禪繪もふるされ」
			『好色御家図象』吉田半兵衛 （原）：「宗徳から茶のからき人目をしのびても 由禪扇の折をうかがひ」
			『諸國御ひいなた』 （小袖）：「此頃都にはやりもやゆうぜんふう」 （小袖）：「地そでんからちや はなのまる乃 ゆうぜんもやう いつもすり糸入」 （小袖）：「地たまこいろ ゆうぜんもやう四きのはなの丸 もいひかのこ はなハすり糸入 もん所はかのこ少入」
貞享4年(1687)	34歳	（初代・三郎四郎）	『男色大蔵』井原西鶴 （小袖）：「目に正月をさせて（中略） 幽禪が萩のすそぎ」
			『源氏ひながた』加藤吉定〔画〕 （小袖）：「ゆる禪法師の簪 正平のおとどが染を始めとして 今様すがたの花車もやう」 （原）（小袖）：「扇のみか小袖にもはやる友禪塗 五条あたりの染屋にあるタがほの模様」
			『女用御家図象』奥田松伯〔編〕吉田半兵衛〔画〕 （原）：「都女郎室に友禪と号する絵法師有けらし 一流を隔にかき出せしかば」 （小袖）：「友禪と号する絵法師有けらし（中略） 女郎小袖のもやうをつくりて或風扇所にあたへぬ」
			『友禪ひいながた』友重清親〔友重斎＝日置徳右衛門清親〕 （小袖）：「室に宮崎氏友禪といふ人有り 繪にたくみなる事いかに斗なく 古風の残しからぬふくみて」
貞享5年(1688)	35歳		『人倫御家図象』 （原）：「無扇師 小川上立売の下にあり 近世由禪扇として一風あり」
元禄3年(1690)	37歳		『餘情ひなた』宮崎友禪斎 （原）：「洛東智恩院門前 元禄第五初春日 技染扇工友禪」 （小袖）：「たのおほ方のもやうばかりあらはし こそそこくわしき色どりハ 人々の情にまか勢持るになん有ける」
元禄5年(1692)	39歳	（二代・三右衛門）	『本絵ひいながた』 （小袖）：「近き頃友禪法師 圓春女 これらの物敷帯を捨て ひながたの品さまざかにわかれたり」
			『和歌物あらかい』宮崎友禪斎 （原）：「洛陽産技染扇工 友禪書之」
			『袖ひいながた』 （小袖）：「ゆうぜんそめ」「ゆうぜん入」「当世ゆうぜんそめ」
			『女重宝記』 （小袖）：「友禪そめの丸づくし（中略） 今みればはや古めかし初心なり」
元禄9年(1696)	43歳		『人倫重宝記』 （原）：「ここにはやる友禪扇ハ ちかごろの名物 地紙ひろく青ふく かの法師が物ずきの自画 知恩院門前に身をすほめ」 （小袖）：「わかし砂半羅 中辻の正平 吉良 友禪ぞめ 今の世の道山夕暮ばかし染ハ」
			『御前義經記』西沢一風〔本名：山本治重、通称：正木屋九右衛門〕 （原）：「そりとは繁島の所 直は紙入 長命華入 きせる たばこ 友禪扇子」
元禄13年(1700)	47歳		『七寶 常盤ひいながた』馬場盛正〔画〕 （小袖）：「友禪でんちゆぞめ」「友禪染」「友禪 伝受ぞめ」
元禄14年(1701)	48歳		『けいせい色三味線』江島良碩 （原）：「是は室においた扇が見へぬ 我らが持ちは十一本青の 友禪が絵に ゆく水に茶葉書で 流れたてるといふ故事じや」
宝永4年(1707)	54歳		『観の葉』祐園健女〔徳山頼子〕〔歌〕宮崎友禪斎〔挿絵〕 （画工）：「洛陽畫工友禪子圖之 寶永二二年庚丁孟春良辰」
正徳3年(1713)	60歳		友禪斎自作とされる「木製友禪斎座像」を作製？ 『友禪 六十歳口自作』と書かれた紙片が、座像裏面に貼り付けてあった
正徳4年(1714)	61歳		『難形祇園林』松根高当・万字軒〔画〕 （小袖）：「ゆうせんいらい」「地白ゆうせん」など
正徳5年(1715)	62歳		『墨絵 ひなた都商人』吉田光範〔画〕 （小袖）：「ゆうぜん染」「ゆうぜんの丸」「地白友ぜんそめあげ」「ゆうぜん墨絵」など
正徳6年(1716)	63歳		『今源氏空船』西沢一風 （小袖）：「替もやう 仕出染 友禪鳥羽繪墨繪の源氏」
享保3年(1718)	65歳		北枝（繪筆台北枝）が金沢で没したため、友禪斎が悼句を詠む？ その悼句として「通し餘淋しきますや時鳥 北枝ノ悼句ナリ」〔『花の扇』文中より〕
享保4年(1719)	66歳		『難形扇の井』武島柳子ほか数名〔画〕 （小袖）：「地白ちや ゆふせん 黒絵入」「地白ゆうせん」「ゆうせんそめ」「色ゆうせん」「花の丸ちゆうせん」など
享保5年(1720)	67歳		巻物掛軸「徳式部石山に月を数する図」に「享保伍庚子六月十五日終加品 御門前町染所茂平」と署名
享保18年(1733)	80歳		『本朝世系録』菊岡淡菴 （小袖）：「友泉は繪師なり、かれが書所を模して染たるなり 尤黒繪にて書たるも有、友泉は祇園町に住す」
元文元年(1736)	83歳(死去)		

出展：筆者作成

表3 「嵐三郎四郎の生涯」に関する年表

(年号(年月日))	(年齢)	(居所)	(『書名』著者「引用文」(出来事)など)
寛文3年(1663)	?	1歳(誕生)	江戸 『うかれきやうげん』中巻「丹山のせいもん」中の「京大阪野郎名づくし」(天和3年(1683)) 「あふみの国にまこへたる。嵐三郎四十一や」→(逆算(1683-21)すると、寛文3年(1663)が誕生年(数え年)となる) 『嵐無常物語』上巻→1(貞享5年(1688)) 井原西鶴【挿絵】吉田半兵衛風 「此男そもそはむかし野のめかめの二葉より」→(江戸)出身
寛文8年(1668)	7月24日	6歳	大坂 『嵐無常物語』上巻→1(貞享5年(1688)) 井原西鶴【挿絵】吉田半兵衛風 「さか町の名物は是戀の中の中村勘之介といひては」→(その後「大坂」で出演) →(「中村勘之介」は、「2代目・中村勘三郎の弟」で「嵐三郎四郎」の前身)【「中村勘」に所属?】
延宝元年(1673)	2月上旬	11歳	大坂 『大方こと集』正本屋十右衛門 「六ほつせり。中村かんの介」→(「市村盛」(初代・嵐三右衛門も同座)に所属)
延宝3年(1675)	11月	13歳	大坂 『顔見世番附』 →(「山村長太主座」に所属?)
延宝6年(1678)	3月	16歳	大坂 『古今役者物がたり』第1丁「太夫座本惣役者付」 →(「山村長太主座」に所属し、若衆方の立役として出演) 『役者遊見録』(享保13年(1728)) →(「顔見世」に上京して、「嵐三右衛門座」に入り、「嵐三郎四郎」と名前を改める?)
延宝8年(1680)	春	18歳	京都 『役者遊見録』(享保13年(1728))前注「六波羅常盤」2番続 →(京都で「嵐三右衛門座」で清盛役として出演?) 『難波立聞音話』お糸紙(貞享3年(1686)霜月) →(「本名左衛門芝居の座元・嵐三右衛門と共に大坂で出演」(井原西鶴と相知る?)
天和元年(1681)	11月	19歳	大坂 『嵐無常物語』上巻→1(貞享5年(1688)) 井原西鶴【挿絵】吉田半兵衛風 「大坂の芝居出しに、すがたの男辰に驚妓女の見とれて」→(大坂(逆巻)の芝居に出演)【嵐三右衛門と袂を分かれて、1人立ち】
天和2年(1682)	?	20歳	大坂 『嵐無常物語』上巻→2(貞享5年(1688)) 井原西鶴【挿絵】吉田半兵衛風 →(「岩本権三郎座」に所属か?) 『好色二代男(難波大鑑)』巻8-2「快におまる心覺」(貞享元年(1684)) 井原西鶴 「難波でかたり、難波とて、あはし三郎四郎たづねて」→(京都・島原で、井原西鶴と再会?)
天和3年(1683)	3月	21歳	大坂 『うかれきやうげん』中巻「丹山のせいもん」中の「京大阪野郎名づくし」 →(上方役者の中の人として挙げられている)
貞享1・2年(1684・1685)	?	22・23歳	京都 『野良女役舞台大鑑(役者別編)』立役目録(貞享4年(1687)正月) 「名代岩本権三郎・京座元嵐三郎四郎」→(岩本権三郎名代の座元を勤める) 『嵐無常物語』上巻→2(貞享5年(1688)) 井原西鶴【挿絵】吉田半兵衛風 →(「岩本権三郎座」で若衆方「光瀬左近」と衆道狂言に出演していた芝居を「柳田久松」が見物し、三郎四郎と面会翌日に自殺?)
貞享3年(1686)	?	24歳	京都 『新竹斎』巻3「京歌舞妓の見鏡旅途の音物」(貞享4年(1687)春) →(「山田七兵衛座」に所属か?)
貞享4年(1687)	夏頃	25歳	大坂 『好色四季報』(元禄3年(1690)頃) 「大いでのわつにおかれ」→(「病氣がら」) 『嵐無常物語』上巻→3(貞享5年(1688)) 井原西鶴【挿絵】吉田半兵衛風 「ひさびさ病中にて、門松立る。おふもいには成まじ」→(嵐三郎四郎が長らくの病氣中であるため、正月の支度と思ひようにできない) 『嵐無常物語』上巻→3(貞享5年(1688)) 井原西鶴【挿絵】吉田半兵衛風 「早重座の事狂言の仕組を、山下半座衛門かたへ、いづれも寄合給へ」→(「早重長吉座」に所属)
	11月		大坂 『嵐無常物語』上巻→3(貞享5年(1688)) 井原西鶴【挿絵】吉田半兵衛風 →(柳田久松が自殺した責任と、病氣と借金のため神経が衰弱し、割腹自殺。→三条の金光寺に、戒名を「雲山一風」として葬られた)
	12月27日	(死去)	大坂 『嵐無常物語』下巻→1(貞享5年(1688)) 井原西鶴【挿絵】吉田半兵衛風 「ひとひらけて清水のふたひり飛て、身に木するにひかり、うめきを蒼人に見せける」→(嵐三郎四郎の死を嘆いて、彼が清水寺の舞台から飛び落ちた) 『嵐無常物語』井原西鶴【挿絵】吉田半兵衛風 →(自殺した「嵐三郎四郎」をモデルとした小説が発表される)
貞享5年(1688)	1月29日	(1周忌)	大坂 『恋色通愛草占』序 「あるは下女も上郎も首長なる河原の嵐が切腹し、借金をこの道といへば」→(嵐三郎四郎の死は、病氣と借金のためと考えられる)
	3月中旬		大坂 『好色四季報』巻3 「死してのち暫く清水・清水庵へ水かけ」→(「嵐三郎四郎」と「清水寺奥の院」の關係)
元禄3年(1690)頃	?	(3周忌頃)	大坂 『好色四季報』巻3 「死してのち暫く清水・清水庵へ水かけ」→(「嵐三郎四郎」と「清水寺奥の院」の關係)

出展:「嵐三郎四郎をめぐる」土田衛(『西鶴論叢』野間光辰(中央公論社)などを基に筆者作成

